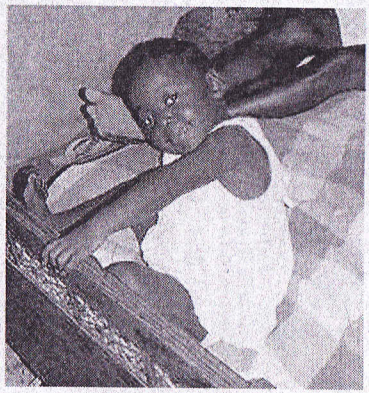
心のパス 親善サッカー

岡山の中学生ら ドミニカ共和国へ

今年1月に発生したハイチ大地震の被災地で緊急支援活動を続けた国際医療救援団体「AMDA」（本部・岡山市）は来月、岡山県、大阪府などの中学生とハイチ隣国のドミニカ共和国を訪問し、被災地の子供らを招いた親善サッカー大会を開く。現地は今もテント生活などを強いられ、心が傷ついたままの子供たちも多いという。AMDAの菅波茂代表は「スポーツは人の心を一つにする。『あなたたちを見捨てない』とのメッセージを送りたい」と話している。【石戸諭】

ハイチ大地震半年 AMDA主催



AMDAの支援で手当てを受ける子供＝ハイチ・ゴナイブで今年1月、AMDA提供

AMDAによると、ハイチでは大地震の発生から半年が過ぎた今も復興が進まず、木の枠を布で覆っただけの被災キャンプで多くの子供が生活している。AMDAは医師を派遣し、緊急支援に取り組んだが、子供たちの心は癒やされない状況が続いている。大地震の発生直後に現地入りした菅波代表らは、被災した子供たちをどう励ますかを考えてきた。

親善大会に参加するのはAMDAの活動に賛同する岡山、広島両県の中学生や、大阪府のサッカーチーム「FC千里中央」に所属する中学生ら計18人。来月16日に出発し、現地で青年海外協力隊員が活動する現場を訪れる。参加費はAMDAが負担する。

現地では、被災キャンプの子供やドミニカ、日本の子供たちで混合チームなどを作って試合する予定。被災地の子供らは親善大会に向けて既に練習に励んでいるという。

AMDAはこの活動を「市民が直接参加する人道支援外交」と位置付け、帰国後も交流を続ける考え。菅波代表は「ワールドカップでも分かるように、ボールを追うことで子供同士が心を通わせられる。活動で復興の後押しにつなげたい」と話す。